

近海郵船

来春に博多―敦賀間でRORO航路



菊池祥貴取締役

近海郵船は来年4月から博多―敦賀間で定期RORO航路を開始する方針だ。最初は1隻による週3便体制で運航を始め、早期に2隻に増配し、デリー化を図る計画だ。西日本海側では現在、フェリー・RORO航路が存在せず、「ミッシングリンク」となっていた。九州―近畿・北陸間はトラック輸送が主流だが、新たな海上輸送ルートを開設することで、ドライバー不足に伴って高まっているモーダルシフト需要に対応する。菊池祥貴取締役は、「九州地区に加えて、北陸・関西北部や中京地区の需要をターゲットに集荷を進めていきたい」と語る。

近海郵船は2014年ごろから事業多角化に向けて、新規航路開設の検討

博多発は自動車関連や鉄鋼関連貨物を見込み、敦賀発は北陸・関西地区に加えて、中京地区もターゲットとする。菊池取締役は、「名古屋からは関西の港湾に陸送するより、敦賀の方が近い。国交省が定める物流分野のCO₂排出量に関する算定方法ガイドラインに基づくと、名古屋発博多向けの輸送で博多―敦賀間のRORO航路を使った場合、陸送と比較してCO₂を約42%削減できる。環境にも優しいことも強みに、利用を促進していきたい」と語る。加えて、災害時の事業継続計画（BCP）の観点からも、利用を進めていく方針だ。

近海郵船は現在、敦賀―苫小牧間でも週6便のRORO航路を運航している。敦賀トランシップで、北海道から博多まで、長距離輸送が可能な体制を整える方針で、博多―敦賀航路のダイヤもスムーズな接続ができるように設定する。「北海道を出て4日目の朝に博多に到着できる。ドライバー不足により長距離の陸送が難しくなる中、新たな輸送手段として海上ルートを確立する」（菊池取締役）考えだ。今後、需要発掘に向けて積極的な営業活動を行う。

日刊CARGO 2018年9月4日 『博多港特集』